

絵にさわる “体”で感じるGF絵画の魅力

ひろせ こうじろう 広瀬 浩二郎 民博 民族文化研究部

あらたな絵画の鑑賞法

七月二十八日、僕は東京・銀座のギャラリーで日本画家・間島秀徳氏の作品を触察した。これまで、僕が「絵にさわる」といえば、視覚障害者用にエンボス加工、立体コピーされた絵画しか思いつかなかった。

しかし、今回は作家の了承のもと、絵そのものに直接「さわる」のである！ ギャラリーには五〇名ほどの観客が集まった。「触察による批評／制作の可能性を探る」というイベントのテーマは、万人の好奇心に訴える意外性があるようだ。僕には触察パフォーマンスをしようという意図はなかったが、この日はヘレン・ケラーのTシャツを身に付け、気合を入れて絵に対峙した。彼女の事績にあやかって「触察者」の心意気を示したつもりである。以下では、当日のインタビュー記録から一部を抜粋し、僕の「触感」をお伝えしよう。

初めに、「両手を広げて動きながらさわっていきましました。手のひらにごっこつした凹凸があったり、例えるなら日本神話の国造りのように、神様がかき混ぜたものがぼたぼたと落ち、海底から陸地がぼこぼここと生まれている躍動



触察鑑賞の歴史的(?)現場。銀座のギャラリーで全身を使って絵画と対話する筆者。撮影・堀江武史

を感じました。次に、指先を使って小さく細かくさわりました。すると、大きくザーツとさわったときには平らだと思っていた『海』の部分も、じつはけっこう凹凸や流れがあることがわかりました。最初はごっこつとして痛い

なあと感じたところも、次第に手のひらになじむような気がしたりと、印象が変化していったのがおもしろかったですね。

さわりたいくなる絵を求めて

間島さんは石や砂などの自然素材を大量の水で流し固める独自の技法を用いて、絵画を制作している。制作過程では、触覚的な表現も意識しておられるという。僕の触察による鑑賞は、「身体で描く」彼の制作スタイルを追体験する行為だったといえる。間島作品のように、世の中には目が見える人も「さわりたいくなる」絵が多数存在する。「さわりたい」とは「目に見えない世界を身体で探る手法」だとすれば、「さわる」ことで、より深く理解できる絵画があるに違いない。人類の「知」の枠組みを揺さぶる力を内包する絵、万人が「さわりたいくなる」作品を僕はGF (Global Friendship) 絵画とよんでいる。GF絵画を発掘し、「絵にさわる」あらたな鑑賞法に賛同する人を増やす取り組みを広げたい。